































## 国兼池

弥生時代に日本へ水田稲作が伝わって以来、二千数百年の長きにわたって、この地の歴史は、水田へ引く限られた水源を少しでも増やすための、地形との戦いの歴史でした。

先人は途方もない労力を投じ、谷をせき止めて堤防を築き、溜池を作ること大きな水源を確保しようとしました。それは、血のにじむような苦勞の連続でした。

国兼池は、江戸時代初期の正保三（一六四六）年の創設と伝えられ、堤防がたびたび決壊し、「お国」と「お兼」という姉妹が人柱にされた悲しい伝説も残っています。延宝三（一六七五）年、従来の木樋を石樋に変える大工事が完成してからも、貯水量は不十分で、干ばつに耐えかねた農民によって何度も一揆がおきていました。

江戸時代の終わりごろ、恵蘇郡代官所の番組となった神川平助は、国兼池の水量を増やす為、高上げ工事に着手し、文久二（一八六二）年、周囲三里三〇町（約一五km）、満水面積一九町歩（約一九ha）の大規模溜池として完成しました。こつして広島藩で最大の溜池となった国兼池は、従来の水源のみでは満水にならず、隣村（板橋村）へ地代を払い森宗池から余水を引きました。

神川はこの後さらに、一二kmも離れた本村川からの導水路を建設し三日市村から上原村まで水路を延長する壮大な工事計画を構想しましたが、慶応三（一八六七）年、神川に不正の疑いがかかると、重い負担に苦しんだ農民は代官屋敷を襲撃し神川を追放してしまいます。

年月が過ぎ、明治二二（一八八九）年に発足した山内東村は、神川の設計を用い、三日市から上原への水路新設を進め、明治四一（一九〇八）年に完成させました。

本村川からの導水路も、戦時中の昭和一六（一九四一）年に着手し、戦後の二三年ついに通水しました。このとき工事関係者は、八〇年以上も昔の神川らの測量の正確さに感嘆したといっています。

昭和二五（一九五〇）年、最後の高上げ工事が始まり、二八年に完成しました。実に三〇七年もの歳月をかけて、満水面積三〇ha、直接受益面積七五・六haを誇る、西日本有数の巨大な灌漑用溜池として完成したのです。

平成七（一九九五）年、周囲一帯は国営備北丘陵公園として生まれ変わり、年間五〇万人が訪れる観光資源の中核として、国兼池は今なお、多くの人々に憩いの場と安らぎのひとときを提供してくれています。